隣のカワウをどうにかせんと

～地域が主力となってこそ 進むカワウのねぐら対策～

自力で出来るカワウ対策があります！！

パンフレットを開いてみてください。

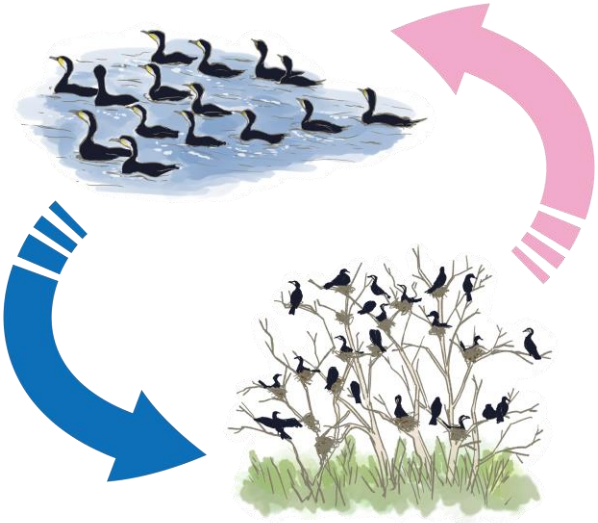
カワウのねぐらやコロニーが、
自宅の近くにできてしまい、
騒音や糞による悪臭などの被害に
困っていませんか？

一緒に解決していきましょう。

放流したアユが食害にあうなど、漁業被害も取り沙汰されるカワウ。
このパンフレットでは、漁業被害対策とは考え方やアプローチの違う
（住宅地にできてしまった）ねぐら対策について解説しています。

カワウってどんな鳥？

あなたの街にやってきたカワウとは、どんな鳥なのでしょうか？彼らに打ち勝つためには、まず、彼らのことを知ることが必要です。



カワウは首を伸ばすと全長約90cm、体重2kgある大型の魚食性の水鳥です。古来日本の河川や沿岸に生息し、鵜飼などに使われるなど、人との付き合いも長い鳥です。しかし、水辺の開発や環境汚染の影響を受けて1970年代に一時絶滅が心配されるほど減少しました。
その後、カワウの個体数と分布は回復の一途をたどり、内水面漁業においてアユの放流や釣りに影響を与えるようになりました。本来カワウは積極的に新しいねぐらをつくる鳥ではないのですが、ねぐらにおけるカワウ対策や、ねぐらにしていた河畔林が治水のために伐採されるなどした際に、新しいねぐらを複数作り、少しずつねぐらが増えていきました。その過程で、住宅地に隣接した場所にもねぐらが形成されることが増えてきました。

カワウは集団で行動することが多く、夜は水辺の林に集まって夜を過ごします。その場所を「ねぐら」と呼んでいます。ねぐらは一年中使われることが多いのですが、関西ではある季節限定で使われるねぐらもあります。ねぐらのうち、繁殖のためにカワウたちが巣を作った場所を「コロニー」と呼ぶことにしています。

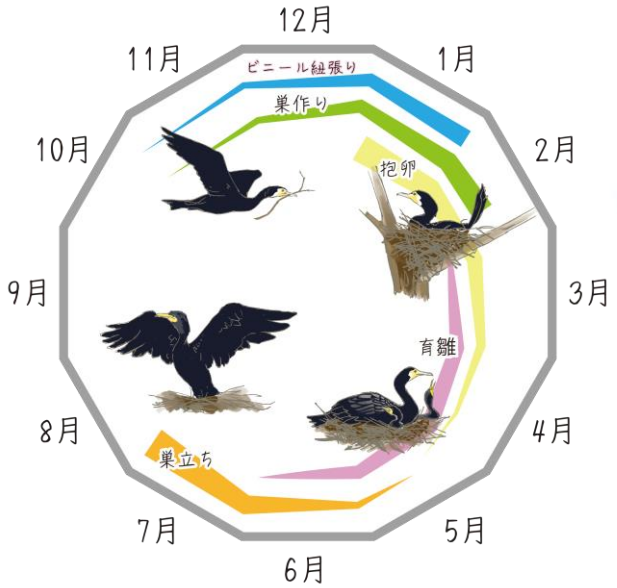
カワウの繁殖期はいつ？

繁殖期は11月～7月
ペアを形成して、巣材を運んで
巣をつくる（11～1月）
↓
３～４個の卵を産んで１か月ほど
抱卵する（２～4月）
↓
雛は2か月ほどの間、親鳥からの給餌を受けて成長する。日照りや雨、捕食者などのリスクを乗り越えた
１～３羽のヒナが巣立つ（５～7月）

定住型のカワウと
季節移動するカワウがいるって本当？

カワウの中には、一年中同じ場所にいる個体と、季節によっている場所を変える個体がいます。
皆さんの見ているカワウのねぐらの個体数は、季節によって変化しますが、春に個体数が多い地域、夏に個体数が多い地域、冬に個体数が多い地域があります。

関西広域連合の管内では、春は瀬戸内海沿岸と琵琶湖周辺のコロニーで繁殖し、夏になると大きな河川の中上流部に移動するものと、琵琶湖に集まるものがいます。冬になって魚が取りづらくなると、瀬戸内海にそそぐ河川の河口部などに移ります。
季節的な移動の主要因は、カワウにとって捕まえやすい魚の量の変化です。河川の中上流部の魚は、冬になると活動が鈍くなり落ち葉の間などにひそんでしまったり、アユのように川を下ってしまうものが多いためです。



ねぐらができる場所って？

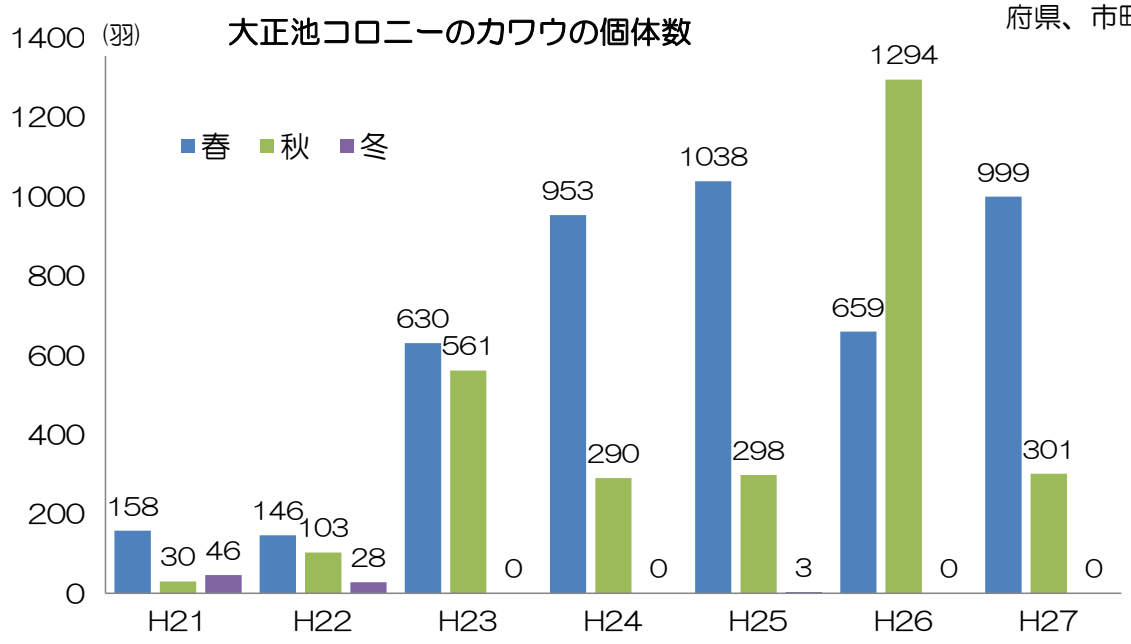
水辺の林で、人が立ち入らない場所がねぐらになりやすいです。
カワウは体が重いので、飛び立つ時に滑空するスペースがないと上手く上昇できません。その一方で、夕方から夜の時間帯に人が近づくことができる林だと人を警戒したり、実際にカワウを嫌う人に木を切られたり、花火や銃などを向けられるためにねぐらにはなりにくい傾向があります。
その結果、道路から死角になるような河原の林や、岸から距離のある中州や島、湖や池の特に入江になっている場所が好まれる傾向があります。
多くの場合カワウは木の上にとまって寝ますが、高圧線の電線や鉄塔などがねぐらになることもあります。また、水上に浮かぶブイや消波ブロックやテトラポットなどの上がねぐらになることもあります。このように、動物の侵入がない島状の場所では地上で眠ることがあり、島では、地上に巣を造って繁殖することもあります。
豪雨災害が増えた近年は、川の氾濫を防ぐため河畔林や中州の林の伐採が河川管理者によって進められている影響で、そうした場所にねぐらをつくっていたカワウが他の場所に新しいねぐらを作る際、住宅地近くの池や沼の岸の小さな林を選ぶことが増えてきました。

あなたの町のカワウのねぐら

水辺〇〇には、〇〇と〇〇にカワウのねぐらがあります。〇〇は冬ねぐらとなっていて、夏にはカワウはほとんどいませんが、冬に個体数が増加するようです。ここのカワウは主に近くの〇〇川の河口や沿岸部などで採食しているようです。一方、〇〇はコロニーとなっていて、春から夏にかけてカワウの個体数が多い傾向があります。この2年ほどで個体数が増加しています。

サンプル

カワウの個体数の変化
年３回の調査での個体数の
季節変動棒グラフ
府県、市町等に応じて可変



カワウ対策のスタートとステップ

被害を減らしていくためにまず必要なのは、被害に困っている皆さん自身が立ち上がることです。その熱意が、まわりの人を動かし、協力を引き出すことに繋がります。

ということで、立ち上がったらすべきこと
ワン、ツー、スリーです！

被害に困っている皆さんの行動

1．泣き寝入りしないで、立ち上がる

2．自治会や市町村に、困っている状況を伝える

3．カワウとその対策について調べる

4．市町村に協力してもらって、勉強会で学ぶ
府県や市町村の職員と一緒にねぐらを視察する

5．勉強したこと、自分たちにできることを
踏まえてどうしていきたいかを考える

6．対策の方法について、専門家や自治体から
指導を受ける

7．各自の役割を決める。実行する。何をしたか、
その結果がどうだったか、記録をつける。

8．勉強会で結果を共有し、次の対策に生かす
情報共有や対策の体制を継続していく

市町村の行動

1．被害に困っている方たちの話を聞く

2．府県からカワウのねぐらの個体数などの
情報を入手する。府県の管理方針を確認し
選択肢を知り、管理の方向性を相談する

3．専門家の意見を聴く。勉強会を開催する。

4．地域住民の意見を踏まえ、落としどころを一緒
に考え、持続可能な対策の体制を作るよう促す

5．対策を後押しする支援について検討する

6．事前、事後の調査を行なう
7．対策の現場に出かけていく

8．結果を共有する

情報を共有し学ぶ

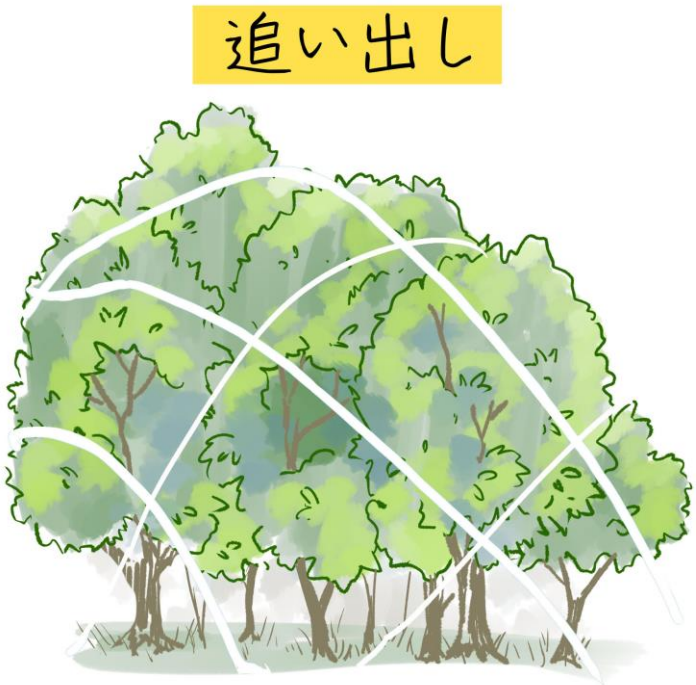
府県や市町村に相談し、専門家の意見を聞いてみると、より良い解決方法がみつかるかもしれません。専門家を呼んで、勉強会を開いて、関係者で状況を共有することから始めましょう。

勉強会では！

- カワウに関する知識を共有
- 被害状況の共有
- カワウ対策についての専門家による講義
- 対策の方針について合意形成
- 対策実施（実演と体験）
- 事前・事後調査の結果の共有
- 今後の計画や役割分担の合意形成

カワウのねぐら管理の選択肢
２つのゴール（範囲制限と追い出し）

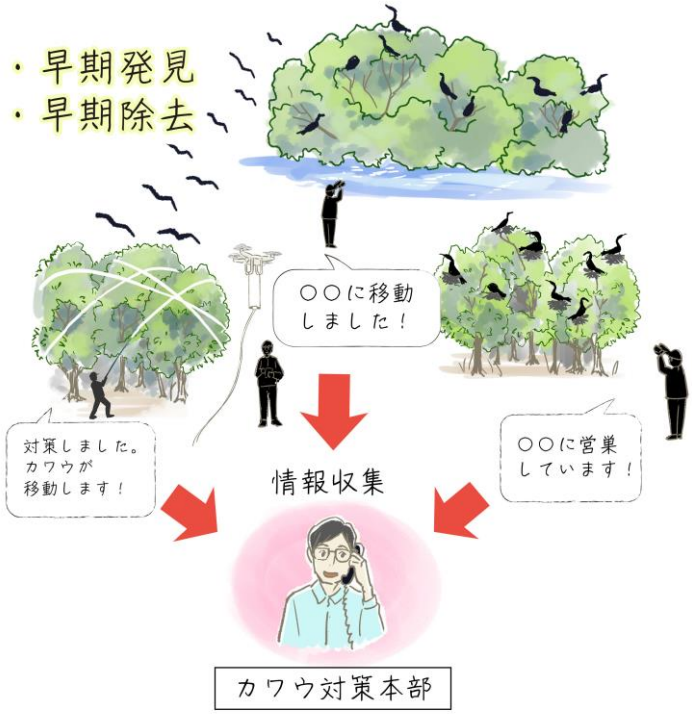
住宅地に隣接した林にカワウのねぐらができてしまい、生活環境被害が起きている場合、その林からカワウを追い出してしまえば、問題は解決します。ですが、カワウがその林に執着していると、一筋縄ではいかないことがあります。また、追い出したカワウが他の住宅地にねぐらを作り、被害が広がってしまう場合があります。そこで、完全に追い出すのではなく、被害が小さくなるように工夫しつつ、ねぐらの存在を許容する選択肢もあります。
どの選択肢を選ぶのが良いか考えるには、被害の大きさ、対策にかけられる労力や費用、ねぐらの位置や地形、カワウの個体数、林の広さ、府県全体のカワウのねぐらの分布などを考慮する必要があります。自治会や自治体と相談し、アドバイスをもらうようにしましょう。



ねぐらの分散リスクに対応する

自分たちさえ良ければ良い、ではいけません。対策によって他の地域の方を困らせてしまわないよう、取り組むことが大事です。
カワウの個体数が多い場合は、一度に追い出さないように、少しずつ対策を実施する、カワウがねぐらに帰ってくる日没から夜にかけての時間を避けて対策するなどによって、少しずつ追い出すと、新しいねぐらの形成を抑えることができます（少数だと新しいねぐらを作るのは少し不安に感じ、既存のねぐらに行くことが多いです）。
工夫をしても、一度に多くのカワウを追い出すことになってしまいそうな時は、自治体にねぐらの分散リスクがあることを伝えて、対応してもらいましょう。
あらかじめ周辺地域（目安としては対策を実施する箇所から10㎞内）の水辺の林をピックアップしておき、対策後の1週間ほど見回りをして、早期発見に努めてもらう。府県にねぐらの情報収集体制があったり、市町村間の情報共有体制があるとより良いです。

新しくできたばかりのねぐらは、少ない労力で簡単に追い出すことができます。いかに早く新しいねぐらを見つけて、追い出すか、許容するかを判断できるようにしておくことが、重要です。



追い出し　の場合の対策

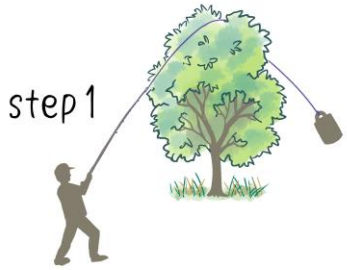
追い出しをする場合、ビニルひも張りが最初の選択肢です。それでもうまくいかない場合や、ビニルひも張りができない環境の場合、樹木の伐採も選択肢になります。

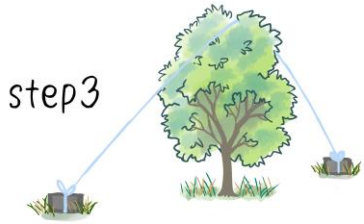
ビニルひも張りで追い出し

釣り竿を使ったビニルひも張りは、釣り竿などの道具があれば、簡単にできる方法です。関西広域連合では、この方法をカワウのねぐらで困っている住民の方々にお伝えして、各地で被害を減らすことに成功しています。

ビニルひもは、視覚的刺激だけでなく、風を受けて不定期に揺れ、ビリビリと大きな音が出ます。そのため、慣れにくく、効果が長く続くのがポイントです。

効果をあげるためには、カワウの繁殖時期を考慮して、巣に卵を産む前に実施する必要があります。卵を産んでしまったあとは、巣に執着するので、ビニルひもの効果が下がります。
何本のビニルひもを張るのが良いか、などは林の広さやカワウの生息数によって変わります。最初からたくさん設置せず、少なめに設置しておいて、時間と共に効果が薄れてきたら、ビニルひもを追加で張ると効果的です。





どんな場所でも？ドローンでひも張り

釣り竿では張れないような足場の悪いねぐらや、樹高が高いねぐらでも、ドローンであればビニルひもを張ることができます。川沿いは風が強いことが多く、風況の悪い日に無理をすると墜落のリスクがあります。バッテリー寿命が短いので、一度にたくさん張るのには向いていません。

最後の手段　樹木の伐採

ビニルひも張りで効果がない場合や、実施が困難な場合、最後の手段は樹木の伐採です。物理的にとまる場所がなくなるので、効果は大きいですが、費用負担が大きくなります。また、分散リスクを抑えたい時は、一度にすべて切らずに、下草刈りから始めたり、1本ずつ切っていくなど工夫が必要です。

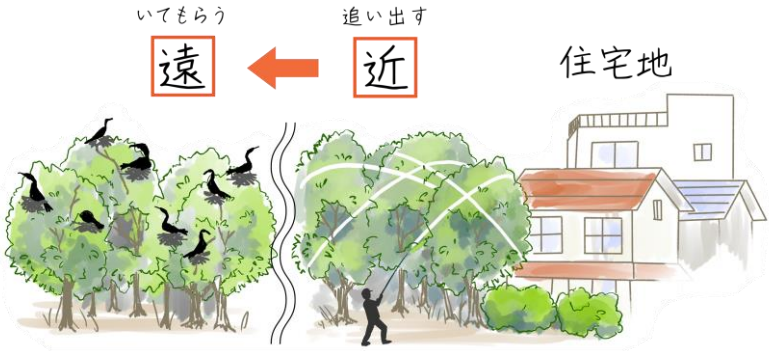
一部追い出し　許容　の場合の対策

カワウを追い出さなくても、被害を抑えられそうな場合は、その選択肢も考えてみましょう。
労力や費用負担を小さくして、効果を得ることができます。

ビニルひも張りで範囲制限

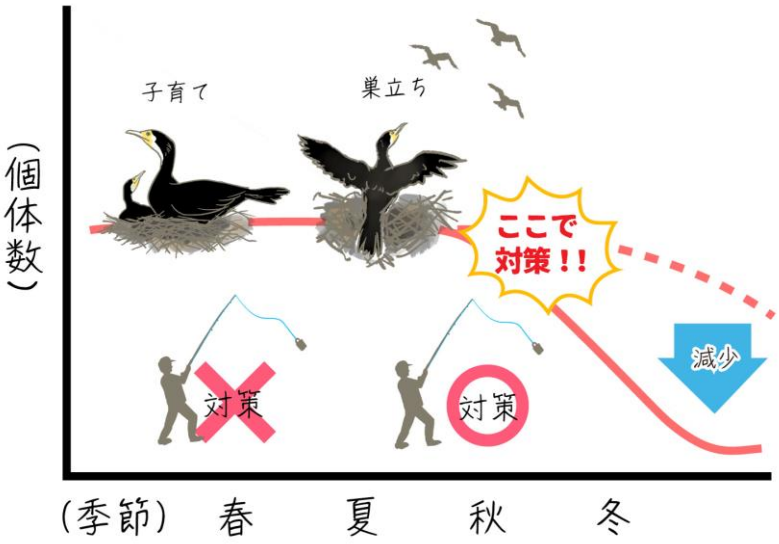
住宅に近いの林からはカワウを追い出し、離れた林にだけカワウには、いてもらうという対策が可能です。

周辺市町村に被害を拡大せず、生活環境被害が軽減できます。



夏の集中対策で悪臭軽減

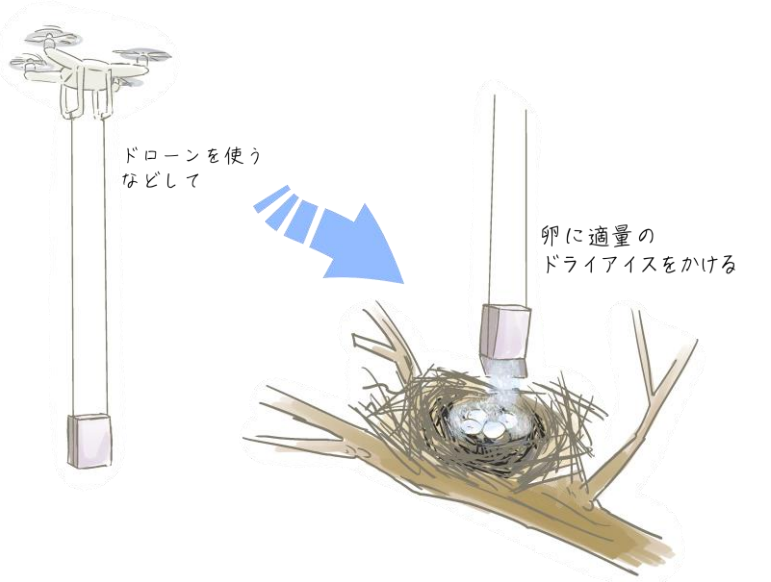
特に悪臭がひどくなる夏期は、カワウの繁殖も終わりに差し掛かる時期です。巣立ちを待ってから、追い払い、ビニルひも張り、池外周部の枯死木の伐採と下草刈りなど、集中的に対策を行ないましょう。
ヒナがいる時は親鳥がコロニーに執着しているので、対策の効果が出ません。ヒナを殺すことになるので許可などの手続きも煩雑です。
対策の実施後、ねぐら入りするカワウの数は減少します。いつもより早くいなくなるだけで、生活被害の期間を短縮できます。



ドライアイスで孵化抑制

ヒナがいる3～7月頃は、給餌のため親鳥の往復が増え、鳴き声もうるさくなります。そのため繁殖を抑制すると、ヒナに餌を運ぶ必要がなくなり、生活環境被害が軽減されます。
巣を落としたり、卵を除去するほうが楽ですが、この場合、カワウは再営巣して卵を産むため、繁殖期が後ろにずれ、育雛期間が長くなるので、かえって良くありません。
そこで、親鳥に孵化しない卵を温め続けさせるために、卵に適量のドライアイスをかけて孵化を止めます。
かけすぎると、卵の殻が割れてしまいますので、分量には注意が必要です。

100巣にドライアイス15kg　約2,500円
必要な道具：棒、脚立
地上営巣100巣の場合　2名で約１～2時間
樹上営巣　50巣の場合　2名で1日



大阪府の対策事例

大阪府熊取町の熊取大池は、近年新たにカワウのコロニーが形成された場所で、2022年3月の調査で332羽、113巣の営巣が確認された。コロニーとなっている樹林が住宅地と隣接しているため、糞害や騒音等の生活環境被害が起きていた。
そこで、熊取町は大阪府と関西広域連合の支援を受けて、関係者との情報共有、ねぐら・コロニーにおける生活環境被害とその対策について議論するため、専門家を招聘して勉強会と現地視察を行い、対策の方向性を自治会と検討した。自治会としては樹木伐採による解決を望んだが、対策費が課題となりビニルひも張りを併用することになった。住宅地に近い北側半分の樹木は伐採することとして、残る南側の樹木にビニルひもを張る計画とした。
樹木伐採の検討に時間を要したため、ビニルひも張りを実施した時にはすでにヒナが孵化しており、ビニルひも張りの効果はごく限定的であったが、専門家による指導を受けながら、熊取町の職員や自治会関係者も参加して行われ、和気あいあいとした雰囲気の中、自分たちで対策ができるという確かな感触を自治会関係者が持つことができた。
カワウが営巣を始めた段階で素早く対応ができる体制があれば、効果的に被害を減らすことができる。

写真：熊取大池の対策実施位置（上）ビニルひもを張る住民（中）勉強会の様子（下）

○○県のカワウの対応方針

50羽以下のカワウのねぐらは早期発見早期除去
-
-

○○羽以上のカワウのねぐらは、状況を判断して対策を検討します。
-
-

○○市からのメッセージ

・・・